海外学会 人&町

（スウェーデン）

マ・ル・メ・紀・行

IPS（国際視野研究会）に参加して

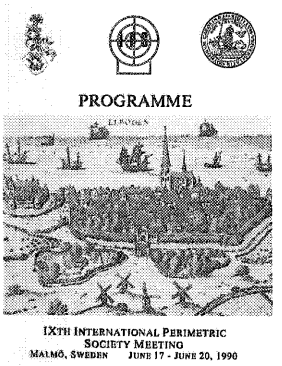
大阪市阿倍野区
湖崎眼科
院長 湖崎 弘（こさき ひろし）

マルメ港

第九回 IPS

International Perimetric Society（国際視野研究会）は、一九七四年パリでの国際眼科学会の時に設立され、以後二年毎に世界各地で開催され、私も常に参加し、いつも演題を出してきた。2nd 76—チュービンゲン、3rd 78—東京、4th 80—ブリストル、5th 82—サクラメント、6th 84—サンタマルガリータ、7th 86—アムステルダム、8th 88—バンクーバー、9th 90の今回は、スエーデンのマルメで開かれた。10th 92は岐阜大・北沢教授の主催で十月に京都で開催予定である。

会長は、アウルホン教授（チュービンゲン大学）、ドランス教授（ブリティッシュ・コロンビア大学）からヘイル教授（マルメ大学）と変わってきた。日本からの理事は現在古野史郎（東京医大）、北原健二（慈恵医大）、北沢克明（岐阜大）の三先生であり、名誉会員に松尾治亘先生（東京医大）が入っておられる。



第九回 IPS Meeting プログラム表紙

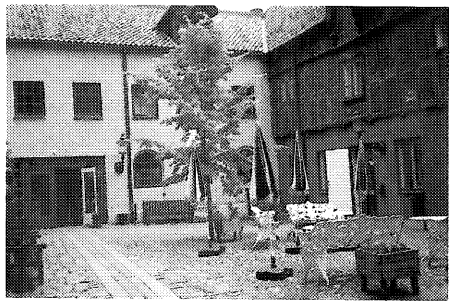
マルメ港

成田からアンカレッジ経由で約十五時間かかってコペンハーゲン到着、町を見物したが、日曜日の早朝のこともあってか閑散とした静かな町である印象しか残らなかった。王宮も数人の兵隊が守っているだけで、誰でも近づける状態。日本と比較するとすべてが違いすぎる。

ここから海峡を船で四十五分かかって渡るとスエーデンのマルメに着く。海峡はバルト海の出口で、昔、日露戦争の時にロシアのバルチック艦隊がここを通って日本海へ向かったのだろう。マルメ港も落ち着いた古い建物に囲まれたきれいな港であった。

学会登録

マルメでの宿泊はサボイホテル。小説の題材にもなった古いホテル。今まで宿泊した有名人の名前がプレートになってエレベーター前に


学会場

学会登録

張ってあり、私の知っている名前も数多くあった。

新潟大の岩田教授、難波君を見つけ学会登録に行く。ここも町は静かで、横断歩道はすべてボタン信号。気付かずに黙って待っていると、バスの中から運転手が手まねで教えてくれた。

登録は近代的なSASロイヤルホテルであったが、事務は名物のスローテンポ。例のごとく列を作りやっと済ます。岩田、難波二人組が手持ちの金をかき集めてエクスカーションの申し込みをしたが、チケットを渡してくれず、私が注意して当日チケットをもらいに行くとチケットは既になく、金を払い戻してくれたとのこと。事務の非能率不備はヨーロッパの特徴か。

学会場

到着した六月十七日（日）は学会登録と質素なウエルカムパーティで終わる。翌日朝八時から学会が始まる。会場はSASロイヤルホテルの向かいにあるセントカートルードセンターという古い木造の建物、由緒はあるのだろうが二階の床は傾いている。約二百人の参加者が世界各国から集まっているが、例によって日本人はアメリカ人に次いで多い。言葉は英語のみ、日本人の講演は多く、十題ぐらいあったが質問は少ない。言葉のハンディキャップのおかげだろう。

一九七六年の第二回からずっと参加してみるとゴールドマンなどの有名人の顔がだんだん少なくなり、ここも世代交替が行なわれていることがよく感じられる。久しぶりにイギリスのフリードマン先生に会ったが、老人くさくなっており、講演も精気がなく、自分もあのようになるかと思うと淋しい。

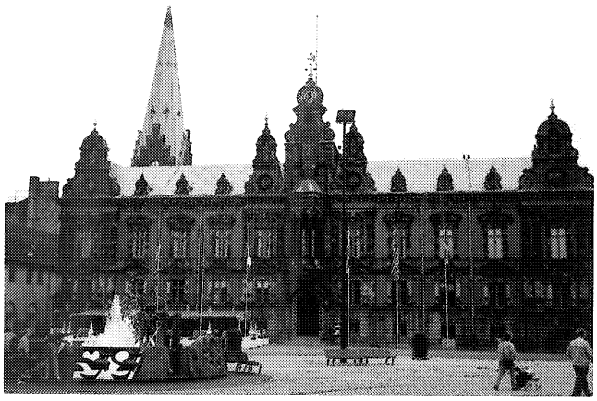
シティホール

六月十七日（日）夜はウエルカムパーティ、十八日（月）夜はデザイン会場の展示場Nord Form 90の見物とディナー、十九日（火）は午後からバス旅行でLundとSvaneholm城の見物、二十日（水）夜はIPSバンケット、二十一日（木）はPost-congress Tourとして朝からバスでScania見物と毎日何か行事がある。

IPSバンケットがマルメのシティホールで行なわれたが中はいろいろの歴史的な絵画が多く、格調高く、ムードがある。他の一室では結婚式の披露宴が行なわれていた。欧米では、パーティが美術館やシティホールで行なわれるのが珍しくない。歴史に囲まれた格調の高い良い雰囲気であり、日本でもまねをしてほしいと思う。

フォークダンス

第二日の午後はバス旅行に行くのが第二回チュービンゲン以来のしき


シティホール

歌合戦

フォークダンス

たりになっている。

今回はまず、Lundの大教会へ行く。中には古いいわゆるからくり時計があり、三時になって人形が動くのを見る。ヨーロッパには大きな教会堂が珍しくないが、ここもまた素晴らしく立派。完成までに何年かかったのだろうか。

それから明治村のように古い建物が集められた所を見物する。最後は十六世紀のSvaneholm城で食事をしたが、そこでフォークダンスを見せてくれる。単純なダンスだが、民族衣装が美しかった。しかし、踊り手が老人ばかりなのに驚く。スエーデンの特徴か？わざと老人を集めているのか、奇異に感じた。

歌合戦

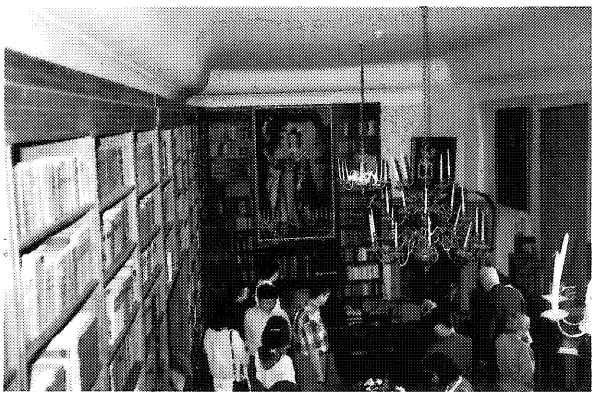
最終日はこれも恒例のIPSバンケットと各国の歌合戦がある。国ごとに出席者が集まり、その国の歌を披露するのであるが、いつからとなくこのような習慣になった。しかも前座としてオランダのグレーブ教授が扮装して小道具を使いながら漫談をやる。IPSメンバーを種にしたジョークを連発するのであるが、よく分からないので困る。英語の分かる人々は大笑いをしている。

今回は少し変わっていて、事前に主催のヘイル教授から歌詞を送ってくれるようにとの依頼が北沢教授の所にあり、相談して今年の日本組は「鯉のぼりの歌」に決めた。日本組代表の東京医大の松尾教授が欠席であったので、私が代表して歌の説明をして北沢教授が翻訳し、一夜作りの紙のカブトをかぶって歌った。

クラカウ先生のお城

最後にPost-congress Tourとして、六月二十一日（木）朝九時からバス一台に乗って三十人ぐらいでScania地方へ旅行に出発。帰りに大きなお城に立ち寄る。聞けば個人の所有で、しかもクラカウ先生の夫人がオーナーとのこと。視野計の中心固視確認の方法として有名なクラカウ法の考案者の先生で、日本にも講演に来られたことがある。夫婦で我々を迎えてくれ、私にも名指しで話しかけてこられた。

写真は書斎であるが、非常に古い本も保存されていた。数えきれないくらいの部屋数があり、そのどれもが古い由緒ある家具で飾り付けられ、また、庭も広大でよく手入れされていた。古い歴史は人類の宝であり、後輩のために残すべきものであり、日本のように悪税制のため古い建物が消えて行くのは憤りを感じる。



クラカウ先生のお城